

土木事業の大切さを学び、自然との深い関わりを体験する

(社)日本土木工業協会関西支部では、協会創立50周年を記念して、小学校3～6年生と保護者を対象として去る7月30日に「親子現場見学会」を開催。近畿地方建設局が奈良県吉野郡川上村で建設を進めている「大滝ダム」とその見学施設である「学べる建設ステーション」を訪れました。

壮大なスケールのダム建設現場を見学するとともに、土木事業の大切さを学びながら楽しめる施設に、子ども達からも大変好評を得て、夏休みの一日を有意義に過ごしてもらいました。



第1展望台にて

学べる建設ステーション全景

見学会には大阪、神戸、京都、奈良などから27組の親子等総勢93名が参加。JR大阪城公園駅前と近鉄橿原神宮前駅前に集合した一行はバス2台に分乗し出発。ホテル到着までの約1時間30分の間、車内で用意した土木の広報ビデオや、大滝ダムインフォメーション・ビデオで勉強してもらいました。ホテルの会場では、当協会関西支部より畑山勝明広報副委員長が「今日参加した皆さんが将来、土木という仕事に携わろうと興味を持ってもらえれば、大変うれしく思う」と挨拶した後、近畿地建大滝ダム工事事務所の三上章工事課長からは、水とダムの大切さなど非常に分かりやすい説明がありました。説明の後、配布された資料とニラメッコする、熱心な親子の姿にしばし感銘。

子供も大人もダム建設を通じて、 壮大なスケールのドラマに出会う。

昼食をとり、一行は水と土木の体感教室「学べる建設ステーション」へと移動。ダム体験手帳を片手に高さ25メートルの吉野杉の大木をイメージしたモニュメント「オオスギノトウ」を登り、バビリオン「ミズモリノヤカタ」へ。ここでは、大滝ダムの建設工事を担当している熊谷組・日本国土開発・大豊建設JVの岡孝所長の説明を聞きながら大滝ダム現場を上から見下ろし、その壮大なスケールに感嘆の声が上がっていました。

バビリオン内では、ダムの模型や映像を使った大滝ダムの目的や工法、人間と水と土木の歴史などを



大杉の塔



暴雨体験

学習しましたが、なかでも一番人気だったのが「豪雨体験室」。雨かっぱを着て完全防備で入った室内では、伊勢湾台風で降った1時間に118ミリと日本最大の187ミリ（長崎県）の雨のほか、600ミリの雨を体験して楽しんでいました。

このほか、ダム現場が一望できる「クモノタカダイ」などを自由見学。神戸市北区から息子さんの勇仁君（小学校6年生）を連れて参加した中西義和さん（41歳）は「思い出づくりに、息子をダムというスケールの大きい現場に連れてきたかった」と語り、勇仁君も「豪雨体験室がおもしろかった。ダムのことが少し分かったし、来て良かった。夏休みの自由研究ができる」と嬉しそうに話していました。

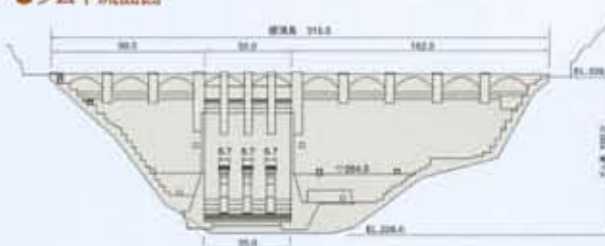
●大滝ダム建設の経緯

紀の川（原流下では酒粕吉野川）は、その源をわが国最南端の太田ヶ原に発し、その豊かな水量は奈良・和歌山両県にまたがる100万人の生活基盤となっています。しかし、流域は昔から台風の常襲地帯であるため、ダムの必要性が論じられていました。それが決定的になったのは昭和34年の伊勢湾台風の影響でした。台風は、紀の川上流に未曽有の豪雨と被害をもたらしたため、こうした洪水でも川が氾濫しないよう、洪水調節を中心に、都市用水、水力発電を目的とした多目的ダムとし大滝ダム建設が計画されたのです。大滝ダムは、昭和40年に建設事業に着手。以来さまざまな関連工事も進み、平成8年ダム本体のコンクリート打設がスタートし現在、堤体積約1,000,000m³の内、約400,000m³の打設が完了している。

●ダムの諸元

型式	重力式コンクリートダム
堤高	100m
堤頂長	315m
堤頂巾	12m
堤体積	約1,000,000m ³
ダム天端高	EL.326.0m

●ダム下流面図



●堤体断面図



大滝ダム事業概要より